

九州における一流高校選手のリクルートに関する研究 —特に進路決定に影響を与える因子について—

浅沼道成, 古澤久雄*, 岡田敬榮*, 松下雅雄*

研究目的

我々の一連の調査研究¹⁾は2つの問題意識のもとに展開されてきた。一つ目は、地方における体育系大学において日本のトップレベルを目指した競技力向上が可能なのか。これに関連して体育系大学の進むべき方向、あるいは体育系大学のあり方を探っていくということであった。二つ目は、地方における地域性を生かした競技力の向上（競技スポーツ）のあり方や可能性を探るということであった。

特に、最初のテーマに対して1989年から「体育専攻学生の生活実態とスポーツ意識について」の調査研究を実施してきた。その結果、体育専攻学生のスポーツ態度にはスポーツを手段的に捉えるという教師的志向²⁾が強かったが、競技スポーツを支持する態度であった。また、それを支える学生生活に関しては進級とともに乱れる傾向が示された。しかし、これは改善できる問題であり、基本的に地方の体育系大学における競技力向上の可能性は否定されなかった。そして、我々は次のテーマとしてリクルートの問題を掲げた。本研究はこのテーマにおける最初の調査研究である。このリクルートの問題は2番目の問題意識にも関わってくるテーマであり、競技スポーツ、特に競技力向上にとって重要なファクターである。すなわち、地方の体育系大学に質の高い選手がリクルートしてくる可能性、また、地方のトップ選手がかかえているリクルートがらみの問題が浮き彫りにされてくるだろう。

特に、現在の競技スポーツの世界で勝利するためには、リクルート、すなわちどれだけ質の高い選手を自チームに獲得するか重要なウエイトが置かれている。極端に言えば、俗に言ういい選手を揃えさえすれば優勝に大きく近づき、また1部とかトップレベルの維持が保証されていると言っても過言ではない。要するに、現在の競技スポーツの世界では自然に集まってくる選手だけを育てて勝つことは至難のわざだと言える。このリクルートの問題はタレント発掘とは全く異なり、即戦力が、特に、高校や大学、実業団といったチームのスパンの中で重要な戦略の一つになっている。故に、リクルート戦略は激戦の様相を呈している。

リクルートという問題は非常に重要な問題である。しかし、大学へのリクルートを考えた場合、入試制度の中で明確な基準のもとに入学者が決定されているわけで、今後もこのシステムは当然維持されて行くべきものである。すなわち、誰もが好き(?)な大学に進学できるわけでもないし、希望通りの就職にもなかなか就くことができない現状である。やはり、本人の努

* 鹿屋体育大学

- 1) 日本の国立・私立の体育系大学の学生や中国・韓国の体育系大学の学生を対象に調査研究を行ってきた。報告書として、体育専攻学生の生活実態とスポーツ意識についての調査(1991)、日本・中国・韓国の体育専攻学生の生活実態とスポーツ意識についての調査(1992)、鹿屋体育大学スポーツ教育研究会発行のものである。
- 2) この言葉は、上杉：体育教師のスポーツ価値意識、香川大学教育学部研究報告1-69, 1987. の研究報告の中で体育教師のスポーツ価値意識が一元的に世俗内禁欲型であったことから筆者が世俗内禁欲型、特に世俗性(手段性)が強いパターンを持っている集団を特徴づけるために用いた。

力と能力と適正の論理の中で決定されて行くべき性質のものである。ただし、受け入れ側ができるだけ優秀な人材を入学や就職させたいわけで、そのための努力は当然必要になってくる。現在、大学では魅力ある大学づくりが叫ばれている。そのためにもリクルート現象の明確な解明が必要になってくる。すなわち、どのような背景のもとにリクルートが展開されているということ明らかにする必要がある。しかし、この種の研究は、日本ではほとんどなされていないのが現状である³⁾。また、欧米のスポーツ地理学⁴⁾の分野で合理的な競技スポーツチームの配置といったテーマのもとにリクルートの問題が論じられている。しかし、リクルートのかかえている背景やメカニズムまで言及されているものはほとんどない。

よって、本研究の目的は進路後競技を続けて行きたいと考えている選手を対象に、進路希望先の決定がどのような要因によって影響を受けているのかということ明らかにすることにある。特に、九州という地域で育った高校一流選手が、進路希望先決定において影響を受けた因子を構造的に把握することにある。この研究はリクルート研究におけるパイロット的研究に位置づけられ、今後の研究のための仮説的モデルの提示を目指した。

研究方法

1. 進路希望先決定に関わる影響項目

本研究では、進路希望先を決定する場合にどのような背景から影響を受けているのかを明らかにするために、影響項目という一連の変数群を作成した。その影響項目を作成するために、1991年9月にK体育大学の2年生77人に対して自由記述形式で予備調査を実施した。そこで得られたデータから大枠として影響を与えている要素を抽出した。さらに様々な方向から検討し大枠の要素から具体的な項目への絞り込みを行った。その結果、表3に示した18の影響項目が採用された。

2. データ

データは、1991年11月から12月にかけて九州地区で実施された「高校一流選手の進路に関する調査」から得られた。この調査は、陸上、バレーボール、テニスの3種目においてそれぞれの九州大会の出場者で、陸上は南北九州大会の決勝進出者の男女の3年生；131校392人、バレーボールはベスト8以上の男女チームの3年生；96人、テニスはシングルス出場者の男女の3年生；35人の計523人を対象にそれぞれの顧問を通じて郵送調査法によって実施された。

有効回収サンプル数は、陸上で183(回収率；46.7%)、バレーボールで60(回収率；62.5%)、テニスで29(回収率；82.9%)であり、全体で272(回収率；52.0%)であった。なお、テニスのサンプル数が少ないのはこの年の3年生の出場者が少なかったためである。

本研究で使ったデータは、この調査で得られたサンプルの内、進路後競技を継続希望するものに限定し総数203のサンプル(陸上；123, バレーボール；52, テニス；28)によるものである。すなわち、本研究の対象者は、進路後競技を継続することを希望している選手である。ま

3) この種の研究の萌芽的研究として直接リクルートをテーマとしていないが、以下の文献が上げられる。

日本の教育地図〈体育・スポーツ編〉, 新堀通也編, 帝国地方行政学会, 1973.

4) Rooney, J. (1975) Sports from a geographic perspective, in Sport and Social Order, Addison-Wesley, Reading, Mass. Rooney, J. (1980) The Recruiting Game, University of Nebraska Press, Lincoln. John Bale. (1989) Sports Geography, E. & F.N. Spon, London.

た、3種目に限定した理由は本研究がパイロット的であること。その上、我々がそれぞれの種目を専門として研究しているためであった。しかし、このことが本研究の限界にもなっていることは否めない。

3. データの分析

18の影響項目に対して、測定尺度として1.強く影響を受けた, 2.影響を受けた, 3.どちらともいえない, 4.ほとんど影響を受けなかった, 5.まったく影響を受けなかった, の5段階評定法を採用し, それぞれに5, 4, 3, 2, 1の得点を与え間隔尺度を構成するものと仮定した。このデータから影響因子を因子分析(主成分法, 及びバリマックス直行回転法)によって抽出した。さらに, 抽出された因子については信頼係数であるCronbach's α を利用した。

また, 属性内の比較においてはそれぞれの因子得点の平均値の差から検討した。平均値の差についてはt検定と分散分析によって有意差検定を行った。

結果及び考察

1. サンプルの特性

表1はサンプルの特性を示している。性別では進路後競技を継続したいと考えている中で, 男子が7割以上を占め男子がかなり多い構成になっている。進路における進学や就職では進学が約8割を占め, 進学希望者の多いことがわかる。また, 競技実績⁵⁾は全体で全国トップが

表1 サンプル特性

		陸	上	バレーボール	テニス	全	体
継続		N=123, 60.6%		N=52, 25.6%	N=28, 13.8%	N=203, 100%	
性別	男	73.6		51.9	75.0	68.2	
	女	26.4		48.1	25.0	31.8	
進路	進学	81.3		65.4	88.5	78.1	
	就職	18.7		34.6	11.5	21.9	
競技レベル	全国トップ	16.3		30.8	10.7	19.2	
	九州トップ	83.7		69.2	89.3	80.8	
継続—進学		N=100, 63.7%		N=34, 21.7%	N=23, 14.6%	N=157, 100%	
進学希望先	国公4年生大学	27.0		23.5	21.7	25.5	
	私立4年生大学	63.0		47.1	78.3	61.1	
	国公立短大	3.0		11.8	0	4.5	
	私立短大	5.0		17.6	0	7.0	
	各種専門学校	1.0		0	0	0.6	
	その他	1.0		0	0	0.6	
希望学部	体育系	64.0		52.9	21.7	55.4	
	非体育系	36.0		47.1	78.7	44.6	

5) 九州トップとは, インターハイ出場者でインターハイ(あるいは他の全国大会)ベスト8未満の成績の選手であり, 全国トップとは, インターハイや他の全国大会でベスト8以上の成績を修めた選手を指す。

19.2%、九州トップが80.8%と約2割が全国的にもトップクラスであった。

次に、進路の中でも進学希望者の進学希望先をみると、国公立4年生大学が25.5%、私立4年生大学が61.1%という状況になっている。そして、希望学部では体育系に対して55.4%と半数以上が希望している。この特徴は陸上に顕著であり、バレーボールでも5割以上であった。しかし、テニスでは21.7%とまったく前2種目とは異なっており、非体育系の希望者が多いことがわかる。これはテニスという種目において体育系にこだわらなく、特に、体育系の競技レベルも高くないという実態にも影響されているものと考えられる。

さらに、表以外のいくつかの特性について検討していく。

最初に、スポーツ集団を考察していく上でその集団が持っているスポーツに対する態度、特にスポーツ価値意識が重要な特性であると考えられる。そこで上杉⁶⁾の提示したスポーツ価値意識の4類型を使って測定してみた。図1, 2, 3はサンプルの属性別の結果を示したものであり、2軸(遊戯—世俗、禁欲—即時)の質問にそれぞれどちらか一方に明確に答えた者だけクロスさせてある。

図1-1と2は性別の比較である。男子はアゴン型が多く、女子はその逆に世俗内禁欲型が多い傾向を示している。これは女子の方がスポーツに対して世俗的(手段的)な態度で関わっていると言える。図2-1と2は全国トップと九州トップを比較したものである。全国トップはアゴン型の割合が多く、九州トップはアゴン型と世俗内禁欲型が同じ割合になっている。こ

		遊戯志向			
禁欲志向		アゴン型 47.7%	レジャー型 8.5%		即時志向
		世俗内禁欲型 39.2%	レクリエーション型 4.6%		
		世俗志向			

図1-1 男子 (N=130)

		遊戯志向			
禁欲志向		アゴン型 37.7%	レジャー型 4.9%		即時志向
		世俗内禁欲型 48.9%	レクリエーション型 11.5%		
		世俗志向			

図1-2 女子 (N=61)

		遊戯志向			
禁欲志向		アゴン型 52.9%	レジャー型 5.9%		即時志向
		世俗内禁欲型 35.3%	レクリエーション型 5.9%		
		世俗志向			

図2-1 全国トップ (N=34)

		遊戯志向			
禁欲志向		アゴン型 42.4%	レジャー型 7.6%		即時志向
		世俗内禁欲型 43.0%	レクリエーション型 7.0%		
		世俗志向			

図2-2 九州トップ (N=158)

れから、全国トップは競技に対して禁欲の中に遊戯(自己目的)的態度を強く持っている集団といえる。この特徴は、上杉の報告⁷⁾による一流選手(日本のトップレベルの個人や集団種目のチームメンバー)のスポーツ価値意識のパターンと類似している。すなわち、本調査における全国トップのサンプルが競技スポーツにおける一流的な価値意識パターンを備えていると考え

6) 上杉：スポーツ価値意識のパターンとその規定要因に関する研究，研究成果報告書，科学研究費補助金(一般研究C)，1990。

7) 上杉(1990)，前掲論文。

られる。図3-1, 2, 3は種目別に比較したものである。アゴン型が多く世俗内禁欲型が少ないといった傾向が陸上とテニスにみられ、その逆の傾向がバレーボールにみられる。これらの傾向は個人種目と集団種目の特性からくるものと考えられる。しかし、種目間におけるパター

		遊戯志向			
禁欲志向	アゴン型	55.8%	レジャー型	6.5%	即時志向
	世俗内禁欲型	31.2%	レクリエーション型	6.5%	
		世俗志向			

図3-1 陸上 (N=138)

		遊戯志向			
禁欲志向	アゴン型	29.2%	レジャー型	6.3%	即時志向
	世俗内禁欲型	60.4%	レクリエーション型	4.1%	
		世俗志向			

図3-2 バレーボール (N=48)

		遊戯志向			
禁欲志向	アゴン型	59.9%	レジャー型	7.4%	即時志向
	世俗内禁欲型	33.3%	レクリエーション型	7.0%	
		世俗志向			

図3-3 テニス (N=27)

ンの違い(個人種目-集団種目の違い)については上杉や浅沼⁸⁾の研究でも明確には触れられていない問題であり今後の課題となる。また、陸上とテニスの価値意識のパターンは一流選手のパターンに類似した形である。すなわち、これらの種目の集団はかなり競技に対してアゴンの、遊戯(自己目的)志向的な態度を持っていると言える。

次に、表2は進学希望者だけに注目した特性で、種目及び競技実績と進路希望地域をクロスした表である。この表から、進学希望者の61.3%が地元九州を、31%が関東を、残りわずか7.7%

表2 進学希望者の進路希望地域

種目\希望地	九州	四国	中国	近畿	関西	東海	北信越	関東	東北	北海道
全体 (155)	61.3	—	0.6	4.5	2.0	—	31.0	—	0.6	
全国トップ (29)	55.2	—	—	—	—	—	44.8	—	—	
九州トップ (126)	61.3	—	0.8	5.6	2.4	—	27.8	—	—	
陸上 (100)	62.0	—	1.0	6.0	3.0	—	27.0	—	1.0	
全国トップ (18)	61.1	—	—	—	—	—	38.9	—	—	
九州トップ (82)	62.2	—	1.2	7.3	3.7	—	24.4	—	1.2	
バレーボール (32)	75.0	—	—	—	—	—	25.0	—	—	
全国トップ (9)	55.6	—	—	—	—	—	44.4	—	—	
九州トップ (23)	82.6	—	—	—	—	—	17.4	—	—	
テニス (23)	39.1	—	—	4.4	—	—	56.5	—	—	
全国トップ (2)	—	—	—	—	—	—	100	—	—	
九州トップ (21)	42.8	—	—	4.8	—	—	52.4	—	—	

が関西等を希望していることがわかる。また、今回の調査で全国トップは九州に55.2%、関東に44.8%という進路先の希望を持っているという2極化の傾向を示し、約半数近くが関東を希望している。種目別にみると、陸上全体では62.0%が九州を、27.0%が関東を希望している。バレーボールの全国トップでは他の種目よりも2極化が明確に現れているが、九州トップでは8割以上が地元に残りたいと希望している。テニスではサンプル数が少なく明確な傾向を述べることはできないが、全国トップは外(関東)に、九州トップも半数以上が外へ出たいと思っ

8) 浅沼：体育専攻学生のスポーツ価値意識に関する研究，体育・スポーツ社会学研究9，道と書院，1990，P. 23-39.

ているようだ。

以上の結果から、全体的には半数以上が地元九州に残りたいと希望していることがわかる。しかし、この希望に対して入試制度や大学の立地状況によって異なった現実が待っていることも明白である。すなわち、競技スポーツにおいて地方の位置づけや役割をどのように捉えているかといったような問題が今後の課題となると考えられる。

2. 影響因子の構造

表3は18の影響項目を平均値(標準偏差)の順位順に並べ替えて示した表である。平均値は5に近づくほどその項目の影響を受けていると考えられる。全体に本人の競技に関わる能力と

表3 影響項目の平均値(N=203)

影 響 項 目	平均値 (SD)	順位
3. 進路希望先のイメージ	3.75 (1.01)	1
4. 進路希望先の競技レベル	3.63 (1.21)	2
2. 大学または企業の知名度	3.62 (1.10)	3
10. 自分の競技成績	3.59 (1.07)	4
12. クラブの指導者の助言	3.53 (1.17)	5
11. 専門競技における自分の将来性	3.50 (0.99)	6
1. 進路希望先の所在する地域	3.47 (1.15)	7
6. 進路希望先のトレーニング場や練習施設の充実度	3.44 (1.23)	8
5. 進路希望先の指導者の有無	3.29 (1.25)	9
9. 自分の学業成績	3.07 (1.03)	10
14. 先輩の助言	2.96 (1.32)	11
7. 進路希望先のクラブ内における上下関係	2.91 (1.15)	12
13. 両親の勧め	2.86 (1.32)	13
16. その他の先生の助言	2.82 (1.24)	14
18. 大学や企業の勧誘者の勧め	2.72 (1.37)	15
15. 友人の助言	2.59 (1.16)	16
8. 進路希望先の提示している条件	2.50 (1.24)	17
17. 兄弟姉妹の勧め	2.09 (1.23)	18

希望先のイメージや競技に関わる環境に強い影響を受け、他者の影響をそれほど強く受けていない傾向がみられる。特に、上位3項目はどちらかというに進路先の持っている対外的な情報であり、この側面の影響力の強さとそれとともに情報量といった別な視点のファクターが関わっている。これはまさに大学や企業が人材集めのために力を注ぎ出している側面である。

つぎに、18の影響項目について因子分析⁹⁾によって固有値1.0以上の5因子を抽出した。表4

9) 分析には統計パッケージSPSSXを用いて、鹿屋体育大学計算機FACOM M760-04を利用した。

は因子負荷量が0.5以上について大きい順に並べ替え、それぞれの因子の固有値、寄与率、 α 値（各因子の安定度をみるための信頼係数）を示している。寄与率は第2因子までが10%以上であるが、第3因子以降は10%以下であり、特に、累積寄与率が59.9%で全体の約6割をこの5因子で説明していることになる。また、 α 値は第4因子に多少低い傾向を示しているが、その他の因子では高い値を示し安定した因子であると言える。

表4 進路先決定に影響を及ぼす因子

	因子負荷量	固有値	寄与率	α 値
F 1 他者の助言		4.78	26.5	.779
友人の助言	.82			
先輩の助言	.71			
両親の勧め	.66			
兄弟姉妹の勧め	.65			
その他の先生の助言	.63			
大学や企業の勧誘者の勧め	.53			
F 2 競技レベル		2.27	1.26	.798
専門競技における自分の将来性	.78			
進路希望先の指導者の有無	.71			
進路希望先の競技レベル自分の競技成績	.65			
自分の競技成績	.65			
クラブの指導者の助言	.60			
進路希望先のトレーニング場や練習施設の充実度	.52			
F 3 進路先のイメージ		1.42	7.9	.594
大学または企業の知名度	.79			
進路希望先のイメージ	.66			
進路希望先の所在する地域	.66			
F 4 競技以外の条件		1.27	7.0	.475
進路希望先の提示している条件	.77			
進路希望先のクラブ内における上下関係	.54			
F 5 学業成績		1.07	5.9	*
自分の学業成績	.83			

*は1項目であり α 値が計算されない

第1因子は、他者の助言や勧めに関わる項目が集まっており、「他者の助言」因子と命名した。第2因子は、本人の将来性や競技成績といった競技に関わる能力と指導者の有無、競技レベル、施設の充実度といった競技における環境の項目が集まっており、「競技レベル」因子と命名した。第3因子は、大学の知名度やイメージ、そして所在地域といった大学の持っている属性に関する項目が集まっており、「進路先のイメージ」因子と命名した。第4因子は、進路希望先の提示条件とクラブ内の上下関係といった2項目で「競技以外の条件」因子と命名した。最後に、第5因子は自分の学業成績という1項目であるが、「学業成績」因子と命名した。

以上5因子の命名を行ったわけだが、トータルして大学や企業に進んで競技を継続しようと考えている一流高校選手は、進路先の決定において、競技に関わる環境や進路先のイメージに強く影響を受けている構造が示された。さらに、競技以外の条件や当然だが自分の学業成績にも影響を受けていることが示された。しかし、他者の助言因子が第1因子として抽出されたが、

表3の項目別平均値からこの集団において他者が強い影響を与えているとは言えなかった。

以上の結果から、図4の実際の進路までの流れを示した仮説的モデルを提示してみた。波線

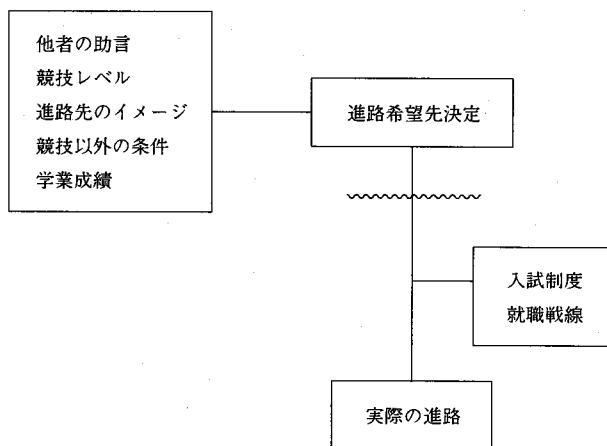


図4 進路決定までのモデル

以下は現実の入試制度や就職戦線をくぐり抜けて進路が決まっている状態を示している。

3. 属性内における比較

ここでは性別、競技実績別、種目別の3つの属性の中で影響因子がどのように異なっているのかを分析することによって、それぞれの属性の特性を明らかにしていく。表5、6、7は、それぞれの性別、競技実績、種目における影響因子得点の平均値とその差を検定したt値やF値を示している。

最初に表5に示すように、男女間において競技レベル因子に5%水準で有意な差がみられた

表5 影響因子得点の性別比較

影響因子	性別		t 値
	男子 (N=137)	女子 (N=64)	
F 1 (他者の助言)	-0.07	0.13	-1.30
F 2 (競技レベル)	-0.13	0.28	-2.78 *
F 3 (進路先のイメージ)	0.04	-0.05	0.64
F 4 (競技以外の条件)	0.08	-0.18	1.74
F 5 (学業成績)	0.02	-0.06	0.48

* P < 0.05

が、そのほかについては有意な差はみられなかった。図5は表5の結果をグラフ化した性別の因子得点のプロフィールである。図5から、競技レベル因子以外には有意な差はみられなかったが、他者の助言、競技レベルで女子の方がスコアが高く、競技以外の条件で男子の方が高いスコアを示している。また、進路先のイメージと学業成績では男女間の差がなく共通に影響を受けている因子であることがわかる。この結果から、女子は男子よりも他者の助言を聞き、特に進路先の競技レベルや環境に敏感で強い関心を持っているということがうかがえる。

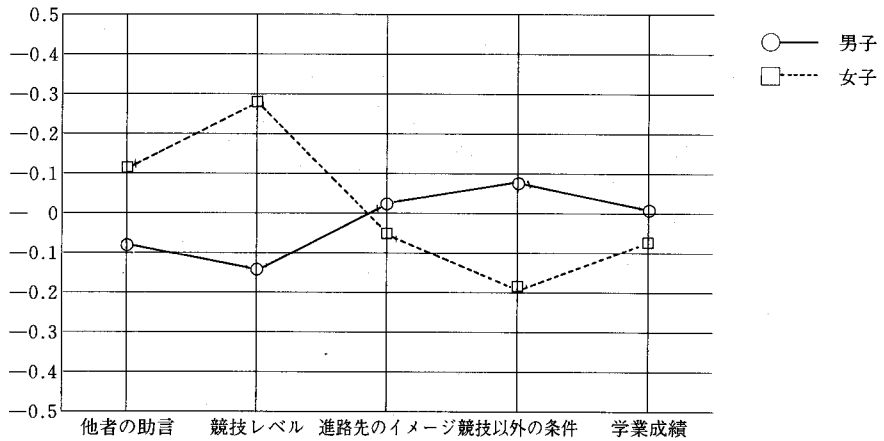


図5 性別比較における影響因子得点のプロフィール

次に、競技実績別比較の表6より、学業成績因子において1%水準で有意な差がみられ、全国トップがかなり低いスコアを示している。そのほかの因子においては有意な差はみられない

表6 影響因子得点の競技実績比較

影響因子	競技レベル		t 値
	全国トップ (N=39)	九州トップ (N=164)	
F 1 (他者の助言)	0.12	-0.03	0.84
F 2 (競技レベル)	0.23	-0.05	1.59
F 3 (進路先のイメージ)	-0.12	0.03	-0.83
F 4 (競技以外の条件)	0.17	-0.04	1.19
F 5 (学業成績)	-0.65	0.15	-4.71 *

* P < 0.01

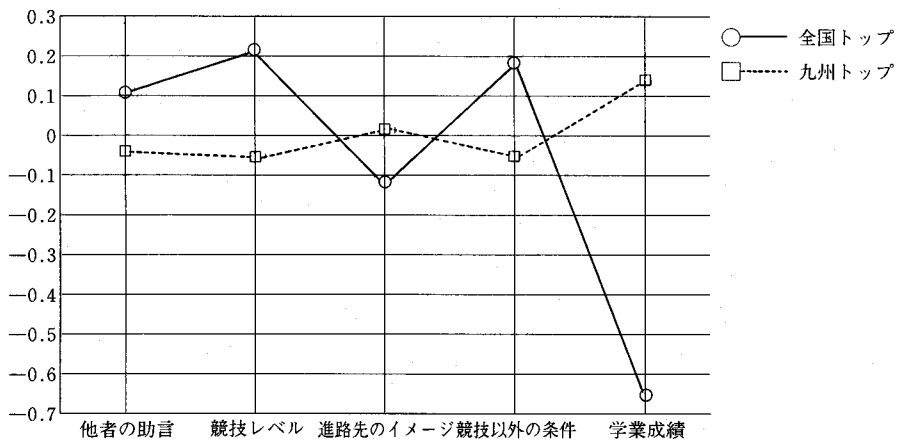


図6 競技実績別比較における影響因子得点のプロフィール

かった。図6は表6の結果をプロフィールしたもので、全国トップが他者の助言、競技レベル、競技以外の条件因子で、九州トップよりも高いスコアを示し、九州トップは学業成績因子に高いスコアを示している。要するに、全国トップクラスの選手は他者の助言を聞き、特に競技レベルや競技以外の条件に大きな関心を持ち、学業成績にはほとんど影響されていないことが読み取れる。特に、学業成績はこのクラスの選手にとって推薦入学やトップ企業に入れるチャンスが高く、重要なファクターにはならない。逆に、九州トップにとっては重要なファクターになる。

最後に、表7は種目別比較を示したものであるが、5因子において有意な差はみられなかつ

表7 影響因子得点の種目別比較

影響因子	種目			F値
	陸上 (N=123)	バレーボール (N=52)	テニス (N=28)	
1 (他者の助言)	-0.12	0.17	0.12	2.31
2 (競技レベル)	0.10	-0.11	-0.22	1.51
3) 進路先のイメージ	0.01	-0.03	-0.01	0.04
4 (競技以外の条件)	-0.05	0.16	-0.08	0.92
5 (学業成績)	0.13	-0.16	-0.29	2.90

た。図7は表7をグラフ化したプロフィールである。図7より、バレーボールでは競技以外の条件因子でテニスや陸上よりも高いスコアを示し、他者の助言因子においてもテニスより多少高く陸上よりも高いスコアを示している。つまり、バレーボールの選手は、他者の助言と進路先の上下関係や提示してくる条件に影響を受けているようである。これも、チームスポーツという特性からクラブ内の人間関係が他の種目よりも重要な問題であり、また、企業スポーツとして華やかであるバレーボール界では入社における様々な条件という問題も絡んでいるためと考えられる。これらの関わりをみれば、密接な絡み合いの中で他者の助言という因子が当然のように影響を与えてくる状況が見えてくる。陸上では競技レベルや学業成績因子で他の種目より高いスコアを示し、他者の助言因子で低い傾向を示している。すなわち、陸上選手は進路先

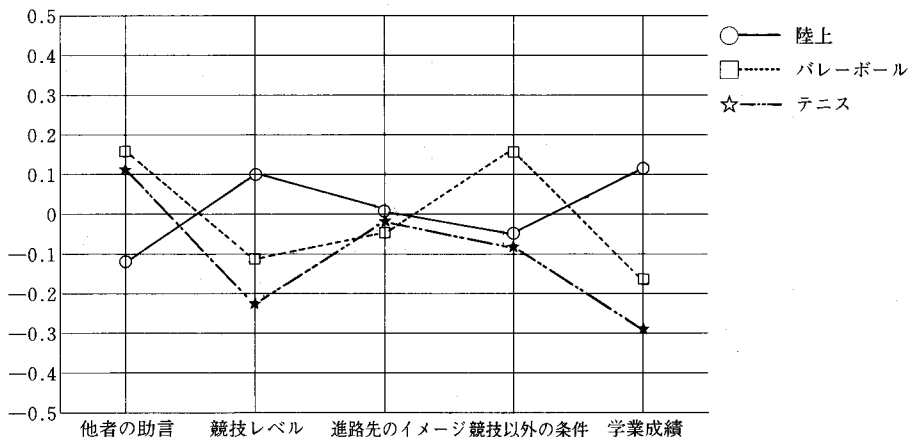


図7 種目別比較における影響因子得点のプロフィール

の競技レベルやその環境と自分自身の学業成績の影響を受けている。これも、種目特性からくる記録への挑戦という自分しか頼れないということ、また、自分自身が最高のトレーニングできる環境を求めて行くといった姿勢からくる特徴だと考えられる。また、テニスでは競技レベルと、学業成績因子で陸上と逆に他よりも低いスコアを示している。唯一、他者の助言因子に高いスコアを示しているが、これはテニスが大学や企業からの情報が少ない（入りにくい）といった状況とインターハイなど団体戦を重んじている背景、また、個人戦の結果がコーチの業績と考えられている背景からそれらの他者が情報の窓口になっているためと考えられる。また、3種目において進路先のイメージ因子では差がなく共通した影響因子であることを示している。

結 語

リクルート問題は、例えば中学生、高校生のスポーツによる越境入学や私立における入学や修学時の特待、企業への入社時における選手への契約金というプロ的現実など様々な問題が内在されている。また、実際地方に大学やスポーツを援助・運営できる企業が少ないために、その受け皿は必然的に東京や大阪を中心とした地域に担われている。しかし、現実に地元志向が強くなり地元（地方）の選手として一流を目指しながら勉学や仕事に励みたいと考えている選手や家族は少なくないと考えられる。だが、今回の研究では直接このような問題に向けられてはいなかった。特に、現実の進路希望という段階における実態の把握に主な目的が置かれていた。本研究では九州という限定された空間の選手が対象であったが、進路希望先決定に与えている影響因子を抽出することができたと思う。まだまだリクルートのかかえている問題の解決や新たな方向を探り出せていないが、本研究でその第一歩が踏み出せたと考えている。今後、全国を視野に入れた研究を進めて行きたい。